

主 題：本当に救われていますか？

聖書箇所：ヨハネの福音書 8章31－36節

この朝、皆さんと続けて見ていきたいのは、ヨハネ8：31－36のみことばです。前回の流れを思い出すために、30節からお読みします。

ヨハネ8：30－36

「:30 イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。:31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうに私の弟子です。:32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」:33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどのように、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」:34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。:35 奴隷はいつまでも家にいるではありません。しかし、息子はいつまでもいます。:36 ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

この世の中には、いくつかの大切な質問があります。たとえば、どの学校に進学するのか、どの会社に就職するのか、だれといつ結婚するのか、どこに住むのか、老後の備えはどうするのかなど、これらはとても重たい質問です。これらの問いにどう答えるかは、その人の人生に大きな影響を与えることになるからです。しかし、これらのどの質問よりもはるかに重大で、その人の今だけでなく、永遠に影響を及ぼす質問があります。それは、「あなたの信仰、あなたの救いは本物ですか」というものです。それが、まさにきょう、私たちが見ようとしている箇所、イエス様が人々に問うていたことでもありました。

改めてこの場面を思い返してみてください。仮庵の祭りにいらしたイエス様は、多くの群衆の前に立って、ご自分が世の光であることを宣言しておられました。ご自分こそがまことの神であり、墮落した人々の暗い心を照らす約束の救い主であると、ひたすらに訴えていました。盲目的な罪人をあわれんで、永遠の滅びへと向かっている魂を顧みられたイエス様は、彼らに対してははっきりと宣言されたのです。8：24の後半で「もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」と。

時に、私たちの耳には厳しく聞こえることばも、その背後には、人々の永遠を何よりも気にかけておられる救い主の変わらない愛がありました。「このままでは罪の中で死にます。だから、わたしを信じなさい」というのが、イエス様の示されていた変わらない愛というものでした。

さて、そんな世の光のことばを群衆たちは耳にします。彼らはこのことばを聞いて、どのような応答をしたのか、30節にこのように書いています。「イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。」と。このことばだけを見ると、うれしい出来事が起こったかのようにも思えます。かたくなだった人々の心が救いへと導かれたと、大きな喜びや歓声が起こってもおかしくない様子に思えます。しかし残念ながら、実際はそうではありませんでした。このあとに続くやり取りに目を留めてください。イエス様は、「信じた」と口にしていた人々に対して、このようなことばをくり返し投げかけていくわけです。37節の後半、このように彼らに言われます。「しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。」と。44節でもイエス様は、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなた方の父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。」と言われました。また47節でも「神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者ではないからです。」と。いったい何が起こっていたのでしょうか。多くの者が「イエス様を信じる」と口では告白していましたが、表面上は、イエス様を信じたかのように見えました。

しかし、その信仰は本物ではなかったというわけです。これは、とても重大な事実でした。

聖書はこの点に関して何度も厳しい警告を与えていました。たとえば、マタイ7：21－23でイエス様自身が、このようなことばを残していました。「：21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。：22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』：23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣言します。『わたしはあなたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』と。よく知られた箇所ですが、見過ごしてはいけません。ほかのだれでもないイエス様ご自身が言われていました。さばきの日には、大ぜいの人たちが「主よ、主よ」と言うのだと。そんな呼び方をするのは、そもそも主に聞き従う気のない者たちではありません。自分が救われていると思っている人たちです。今の私たちのように、神様のことを知っていて、神様と関係を持っていて、さまざまな働きを熱心になして、自分自身が天国に行くに信じて疑わない者たちのことです。そのような多くの人たちに対して、イエス様は告げられるのです。「わたしはあなたを全然知らない」、「わたしから離れて行け」と。

当然、ここにいるだれもが、こんなことばを最後に耳にたくはありません。だからこそ、今私たち自身が真剣に考えなければならない質問があります。「自分の信仰は、自分の救いは本物なのか」ということです。昔から変わらず、多くの人たちがイエス様への信仰を告白します。多くの人たちが聖書の教えに同意します。主の名によって働きもします。しかし、本当の意味で信仰を持っている者は多くありません。では、どのようにして私たちは、自分の信仰が本物なのかを知ることができるのでしょうか。最後の日にわかるのではなく、今、自分自身の信仰が偽りではなく、確かに神様から出たものであると確信を持つことができるのでしょうか。感謝なことに、みことばはその答えを私たちにはっきりと教えてくれていました。特に、今回私たちが見て行く箇所には、真の信仰に見られる二つの特徴が挙げられています。その内容と一緒に目を留めながら、私たちが勝手に思い描く姿ではなく、神様の描く救われている者の姿と自分自身を、よく照らし合わせてみましょう。

○本当に救われていますか：真の信仰に見られる二つの特徴

1. 主のことばにとどまる 31節

まず、真の信仰に見られる一つ目の特徴は、主のことばにとどまるということです。本当に救われている者なら、どんな時も変わらずに主のことばにとどまり続け、主のことばに従い続けようとする者でした。31節でイエス様がはっきりと述べられています。「そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうに私の弟子です。」と。ここで二つの点に注目してください。

▶「とどまる」

まず注目してほしいのは「わたしのことばにとどまるなら」の「とどまる」ということばです。「とどまる」と訳されていることばは、もともと、何かがずっとその場に残り続けている様子や、そこから離れようとしなない姿を表わすものでした。そこから「その場にとどまる」、「居座る」、「家に住み続ける」という意味で用いられていました。ある場所から動かないような姿を表わすものでした。ですから、イエス様がここで言わんとしたことは明白でした。本当の弟子というものは、一時的にイエス様のもとにいるような者ではありません。少しの間だけ教えを楽しみ、感動を覚えたり、自分に都合の良い時だけ、都合の良いものだけ、そのことばに従う者でもありません。本当の弟子とは、イエス様とそのことばのうちから、決して離れようとしなない者でした。みことばに自分自身を支配させ、みことばを常に自分自身の住まいとする者でした。良い時も悪い時も、たとえそのみことばが厳しくても、どんな状況にあっても、みことばを求め、みことばの前にへりくだり、みことばに喜んで従い、みことばを愛する者が本当の弟子の姿でした。

聖書解釈者のひとり、レオン・モリスも次のような説明を残しています。「イエスに表面的な関心を抱くことは容易い。しかし、真に問われるのは『とどまり続けること』です。」と。

▶「あなたがたはほんとうにわたしの弟子です」

また、もう一点皆さんに注目してほしいのは、イエス様はここで「もしわたしのことばにとどまるなら、」に続いて、「わたしの弟子になります」とは口にされてないところです。「弟子になります」とは言わず「もしわたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうに私の弟子です。」と言われたのです。言い換えれば、イエス様のことばに従うことがその人を本当の弟子にするのではない、みことばに従う行いがその人に救いをもたらすのではないということです。救いは神様からの大きな恵みで、ただイエス・キリストを信じる信仰によるものでしかありませんでした。エペソ2：8-9でも「:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。」とはっきり言われています。イエス様のことばにとどまることが私たちを救いへと導くではありませんが、恵みによって与えられる真の信仰は、その人のうちに主のことばにとどまるという良い行いを必ず生み出すものでもありました。エペソ2：10にも「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」と書いてありました。イエス様は「わたしのことばにとどまれば、あなたは救われます」などと教えていません。救われている者ならば、必ず、わたしのことばにとどまるようになるということを見せていたわけでは

残念ながらある人たちは、行いということばを聞くとすぐに「律法主義」と結びつけようとします。行いは救いと何も関係なく、信仰告白して恵みによって救われたら、それで十分なのだ主張する人たちもいます。確かにその半分は正解です。どんな行いも救いをもたらすことはありません。しかし、イエス様自身、ここではっきりと言っています。救い主がもたらす恵みによる救いとは、同じ恵みの力によって、その人を新しく造り変えて、必ず良い行いを生み出すものでした。恵みによる救いは、私たちをただ罪から救うだけでなく、それによって私たちが新しく造り変え、主に喜ばれる者として生きていくために変え続ける力あるものでした。だからこそ、恵みによって救われた本当の弟子であることを証明するものは、恵みによって変えられ続けていくこと、さらに言うならば、主のことばにとどまり続けていく従順な生き方になるわけです。

この真理の教えはこの箇所だけではなく、みことばを読んでいくと何度もくり返し教えられていました。いくつか見てみましょう。ヨハネ14：21aでは「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。……」と。14：23-24では「:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。」とあります。また、同じ著者ヨハネは手紙の中でもこのようなことばを残していました。Iヨハネ2：3-5を見ると「:3 もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。:4 神を知っていると

言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。:5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。」と。神様のことばを守るということがその人に救いをもたらすわけではありません。神様に救われているのであれば、その神様のことばに従うことが本当の弟子の生き方でした。勿論、本当の弟子となったからと言って、神様のことばを常に完璧に守れるわけではありません。私たちはみな、自分の経験を通して知っています。日々の生活を振り返っても、そこには絶えず罪との戦いがあり、誘惑との格闘があります。主に従うべきなのに、自分の肉に従ってしまうこともあります。大

きくつまずいてしまうこともあります。みことばを通して、自分自身が見たくない罪深さを何度も示され、心が責められ、打ちのめされることも本当の弟子は何度も経験しています。しかし、本当の弟子であるならば、その中であっても、主のことばを遠ざけたり、主のことばから離れることはありません。自分自身の心が責められ、苦しいものであっても、主のことばから離れようとはしません。みことばをしっかりと握って、自分の思いや考えがますます主のことばに一致していく者になりたいと願い、歩んで行こうとします。どれだけみことばが自分を責めても、逃げ出さず歩んで行くのはなぜでしょう。それは、何よりも主のことばを愛しているからです。愛する主に従い続けていくことが、その人にとって、最も手放したくない最高の宝だからです。イエス様もヨハネ14：15でこのように言われていました。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と。主を心から愛している者の応答は、愛する主のことばを守ろうとする従順さでした。

改めて、自分自身に問いかけてみてください。果たして、私たちは主と主のことばにとどまり続けようとする者でしょうか。良い時だけではなく、悪い時も、何があってもみことばを求め、みことばの前にへりくだり、みことばに喜んで従い、悔い改めながらみことばを愛する者として、今を歩んでいるでしょうか。

イエス様はある時、一つのたとえ話として「種蒔き」の話をされました。主のことばを聞いた者の異なる応答を、四つの場所に蒔かれた種にたとえて説明されました。マタイ13：18－23に記されています。「：18 ですから、種蒔きのたとえを聞きなさい。：19 御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪っていきます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。：20 また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。：21 しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。：22 また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。：23 ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。」と、四つ挙げられていました。

一つ目は道ばたに蒔かれた種でした。この種は、救いのことばを聞いても、自分には全く関係のないものと心をかたくなにし、拒む者たちの姿を表わしていました。聞いても、端から受けつけない、聞こうとしないような者たちでした。

二つ目は岩地に蒔かれた種で、救いのことばを聞いた時、感動したり、涙を流したり、一度は喜んで受け入れるような者のことでした。福音やみことばを聞いて好意的に受け取ることで、その姿は本当の弟子であるように思えますが、この者のうちには、実際には救いの根が張っておらず、最初から本当の弟子ではないので、さまざまな困難や迫害がやって来ると、すぐにつまずくのです。21節を見ると、単に困難や迫害ではなく「みことばのために困難や迫害が起こると」と書いてあります。つまり、みことばに従っていく時に伴うさまざまな困難や迫害を経験すると、根がなく本当に救われていない者は、自分の信仰を否定して、主から離れて行くというわけです。岩地に蒔かれた種は、最初は本当の弟子に見えたとしても離れて行く者でした。

三つ目はいばらの中に蒔かれた種で、二つ目と同じく、救いのことばを聞くと、最初は好意的に受け入れるような者でした。具体的に挙げるなら、信じると告白するだけでなく、喜んで聖書を読み、熱心に教会に通い、多くの奉仕をするような者です。傍から見れば、主に従っているようにも見えますが、残念ながら、この者のうちには主への愛よりもこの世への愛が一番にあるために、しばらくすると主のことばを捨てて、世に富みを求め、世の楽しみや幸せを見出すようになっていきます。この者も、最初から本当の弟子ではないので、主のことばにとどまらず離れて行きます。その結果、実を結ぶことはないのです。

最後、四つ目は良い地に蒔かれた種でした。良い地に蒔かれた種は、救いのことばを聞いた時、心から悔い改め、自分を捨てて、主に従っていこうとする者でした。この者はたとえ、みことばに従うことに大きな痛みや犠牲が伴っても、喜んで従おうとします。また、世の誘惑が押し寄せ、罪を犯すことがあっても、悔い改め、罪から離れ、何よりも主を愛し、前に進み続けていこうとする者でした。自分自身を掴んでくださっている主にとどまろうとするのです。主と主のことばにとどまって生きていく本当の弟子だからこそ、この者は確かに大きな実を結ぶことになるのです。

イエス様のことばはあやふやなものではなく、本当の弟子と偽りの弟子とには明確な違いがあると言われていました。とどまり続けている本当の弟子か、とどまらず離れて行く偽りの弟子かのどちらかではないのです。自分たちの周りでも、かつてはイエス様を信じると告白し、自分はクリスチャンだと口にしていた者がいます。今は全く神様や救い主に関心を示さず、みことばや神の家族に対する愛に欠けている者の姿を見る時に、「この人はいったいどうなってしまったのだろう」と思うわけです。私も不思議に思うことがありました。私たちは人の心のうちが見えない以上、断言することはできませんが、みことばの教えに素直に耳を傾けるのであれば、少なくとも言えることがあります。「この人は、以前はクリスチャンだった」などという立場は存在しないということです。本当の弟子として、今も主にとどまり歩み続けている者か、そもそも最初から本当の弟子として歩んでいなかった者なのか、みことばに照らし合わせるなら、どちらかではありません。勿論、本当の弟子であっても、ひどい罪を重ねて、一時的に神様に逆らって歩むような悲しい瞬間はあります。

ダビデがまさにそうでした。ダビデは姦淫の罪を犯しました。しかもそれでとどまらず殺人まで犯しました。主の前に悪に悪を積み重ねている時もあったのです。しかし、その時の彼がどのような状態に置かれていたのか、ダビデ自身がこのように告白していました。詩篇 32 : 3-4 で「:3 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。:4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。」と。罪の中にある間、ダビデは責められ、苦しんでいました。かたくなに罪を悔い改めず、神様に逆らう罪深さの中であって痛みを経験していました。その状態の中で、彼はいつさいの喜びや楽しみを見出すことがなかったのです。同じように、本当の弟子になっても罪を犯すことはあります。しかし、本当の弟子になった者が罪を犯す時、そこには本当の平安や慰めはありません。自分が神様に逆らって歩んでいるとわかっていれば、そこには必ず責めがあり、苦しみがあります。罪の中にあると知っていながら、心に何の責めも覚え、幸せに歩むことができるような信仰者はひとりとして存在しません。なぜだと思いませんか。恵みによって救われた本当の弟子は、神様を愛したいという思いがうちに与えられているから、正反対の罪がある時に、いても立ってもいられなくなるのです。その罪から離れたい葛藤や戦いが常に生じるからです。神様がうちに働いてくださっている本当の弟子は、罪をそのままに置いておくことはできないからです。

本当の弟子はとどまる者でした。偽りの弟子は離れて行く者でした。私たちはどうでしょう。主のことばにとどまる弟子として、今歩んでいるでしょうか。どんな困難が伴ったとしても、何よりもみことばを愛する者として歩んでいるでしょうか。主のことばにとどまる、それが真の信仰に見られる一つ目の特徴でした。

2. 罪の奴隷から自由にされている 32-36節

真の信仰に見られる二つ目の特徴は、罪の奴隷から自由にされているということです。本当に救われている者は、最大の敵である罪の力から解放されている者でした。ヨハネ 8 : 32 で、イエス様はこのように続けています。「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」と。ここには本当の弟子に与えられたすばらしい約束が書かれていました。どんな約束なのか、二つのことに注目して、イエス様のことばを考えてみましょう。

▶「真理」

イエス様はくり返して言われました。「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」と。ここで2回使われている「真理」とは何のことでしょう。聖書には「真理」として描かれているものがいくつかあります。たとえば、父なる神様も「真理」として描かれていました。詩篇31：5に「私の霊を御手にゆだねます。真実の神、主よ。あなたは私を贖い出してくださいました。」と。また、神様のことばである聖書もそうです。詩篇119：160にこのように書かれています。「みことのすべてはまことです。……」と。また、聖霊なる神様に関してもヨハネ15：26で「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」とあり、それに加えて救いをもたらす福音のしるしも「真理」として描かれています。エペソ1：14で「この方であってあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。」と。聖書を見れば、父なる神、聖書、聖霊なる神、福音の知らせも「真理」として描かれていました。これらは確かにどれをとっても罪と罪過との中に死んでいる者たちの中で働いていて、救いをもたらすことのできる力ある「真理」でした。今、私たちが学んでいるヨハネ8章で、「真理」は特にイエス様とそのことばを表わしています。イエス様も「真理」のお方でした。それについてはヨハネ1章にも書かれていますし、後にイエス様ご自身もヨハネ14：6でこのように証言されていました。「……わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と。イエス様はこの世に来られた神の御子であり、この方こそが人々に救いをもたらし、父のみもとへと人々を導かれる約束の救い主、「真理」のお方でした。

▶「自由にする」

その「真理」のお方がなされる働きが何か、8：32に「……真理はあなたがたを自由にします。」と書いてあります。この「自由にする」のことばには、もともとだれかを支配から解放する、奴隷状態から自由にするという意味が含まれていました。もともとは何かに囚われていたということです。囚われていた状態から解放すること、自由にすることを意味していました。つまりイエス様は、「真理」であるご自分こそが、鎖につながれて身動きができない奴隷を、助け出すことのできるお方なのだとされているのです。主を知らないすべての人は、生まれながらにみな、罪の奴隷でした。罪の力のもとで奴隷になっていました。34節でもイエス様は「イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者(罪を継続的に行っている者)はみな、罪の奴隷です。」とされています。例外はいません。ここにいる私たちもみな、罪の奴隷として生きていました。光よりもやみを愛し、真理より偽りを求め、ただ罪を愛し続けて生きていたのが私たち罪人でした。それがかつての状態だったということです。しかし、「真理」であるイエス様を信じ受け入れた時に、すべてが変わりました。「真理」であるイエス様は罪の奴隷であった私たちを鎖から解き放ってくださいました。

さらに言えば、イエス様は二つのことにおいて、私たちを助け出してくださいました。一つは、罪がもたらす罪の結果——罪のさばきから救い出してくださいました。かつてはその罪のさばき、その鎖に囚われていた私たちを、助け出してくださいました。ローマ8：1にこう書いてあります。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」と。感謝なことに、イエス様の血によって罪を赦され、義とされた私たちは、もうさばきの日を恐れ震える必要はなくなりました。ただ主であって「自由」の身とされた私たちは、罪に定められることはもうないのだと安心できるようになったのです。イエス様は罪がもたらす結果であるさばきから解放してくださいました。

それだけではなくもう一つ、イエス様は罪の力、支配からも私たちを救い出してくださいました。ローマ6：6-7に「:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。:7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」と書いています。かつてはみな、罪の言いなりでした。私たちの考えや思いも、私たちの抱く感情や願い、発することばや行動もすべて、自分自身を愛する罪によって汚れ、神様に

敵対することしかできませんでした。しかし感謝なことに「真理」を知った時に、「真理」によって「自由」にされた私たちは、罪の支配から助け出されて、罪に対して勝利する者になりました。罪を犯す必要はなくなり、救われた後も、罪を犯すことは確かにありますが、罪を犯せば、義やきよさを追い求めていきたいと願います。自分の力ではできないけれど、主の助けによって、罪から少しでも離れて生きたいと願う者となり、実際に罪から離れることができる者になりました。以前のように、私たちは罪の前になす術もなく服従するだけの者ではなくなったということです。先ほどのローマの続きにもはっきりと記されていました。6：16－18にすばらしい喜びが書かれています。「：16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。：17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの基準に心から服従し、：18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」と。もとは罪の奴隷だったので、なすことはすべて罪でした。しかし、そこから解放されて義の奴隷となったからこそ、義を求めていくことができる者へと変えられたのです。

それが主によって新しくされた本当の弟子の姿でした。主に救われている者は、主のことばにとどまり、罪から解放された大きな喜びを持ってへりくだり、義を追い求めていこうとする「自由」な者として生きていくことができるということです。その生き方こそが、最も「自由」な生き方でした。勘違いしてはいけません。ここで主が言われている「自由」というものは、救われた後も、自分のために、自分が好きなように生きていくことができるという自由ではありません。それだと、かつての罪の奴隷だった時と、何ら変わっていないわけです。罪の奴隷だった時に私たちが求めていたことは、自分の好きに生きていくことでしたから。私たちが「自由」と聞くと、どうしても、何でも好き勝手にできる自由をイメージしてしまいがちですが、そんな自由ではありません。主が与えてくださる「自由」は、愛する主に心から喜んで従っていくことができる「自由」です。罪を自分の主人として、罪を愛していた時は、主を知ろうとも、主に従おうともしませんでした。そこには罪悪感があり、恐れがあり、絶え間ない失望がありました。しかし、その罪の鎖から「真理」が私たちを解放した時、主が私たちのうちに生まれ、その結果、私たちは主を知り、主にある喜びを知り、主にある満足を知り、主を喜ばせる者として生きていくことの楽しみを知り、主に従っていきたくと願う者へと造り変えられたわけです。本当の「自由」は、主に従う生き方にありました。「真理」であるイエス様は、ご自分を信じるすべての者に、主とともに生きていくことにある「自由」を与えてくださるといふすばらしい約束でした。

この話をユダヤ人たちは聞きました。彼らの応答が33節に記されています。「彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどのように、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」と。ご存じのとおり、イスラエルの歴史というのは奴隷の歴史でした。エジプトで400年、囚われていたことを皮切りに、彼らはアッシリア、バビロン、シリア、またこの時も実際にローマ帝国の支配下に置かれていました。彼らの歴史は文字どおり、奴隷と切り離すことができないものでした。しかし、そのように肉体的な奴隷を長らく経験していた彼らにとって、一つの誇りがありました。それは霊的な自由さでした。彼らは、自分たちがアブラハムの子孫という立場に誇りを持っていて、その血筋ゆえに、自分たちは自動的に神の国を受け継ぐのだと信じていたのです。たとえ地上で、実際にどれだけ鎖につながれていても、自分たちは神様に特別に選ばれていて、自分たちは神様との関係があり、自分たちは天国に行くのだと思い込んでいたわけです。ですから、そんな彼らに対してイエス様はこのように答えます。34節に「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。」と。その場にいたユダヤ人たちは、まさか自分に救いが必要だと思ってもみませんでした。宗教に熱心で、特別な血筋が神の国へと導くのだと信じて疑わなかった彼らにとっては、イエス様のことばを聞いても、そのとおりで信じて受け入れるのではなく、「自由になる」というイエス様のことばに混乱しました。いや、憤りさえ覚えました。自分たちは何の奴

隷にもなっていないと腹を立てたのです。しかし、皮肉なことに、そんな彼らこそ罪の中を歩み続けていた罪の奴隷だったわけです。盲目な彼らは、自分たちの状況をわかっていませんでした。自分たちこそが救いを必要としている存在だということに彼らは気づかなかったのです。そのような者たちに対して、イエス様は35-36節でこのように語りました。「:35 奴隷はいつまでも家にいるではありません。しかし、息子はいつまでもいます。:36 ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」と。救い主の大きなあわれみがここにも示されていました。「奴隷はいつまでも家にいるではありません。」というのは、当時の奴隷はいつまでも家にいる権利を持っていませんでした。仕えていた主人の好意によって、一時的にその家の中で自由を経験していたとしても、ある日突然、別の人に売られていくことがあれば、その立場を追われることもありました。奴隷が持っていた自由は、いつまでも続く確かなものではなく、一時的なものでした。この場で話を聞いていた高慢な彼らは、自分たちこそが自由なのだと思っていました。アブラハムの子孫であり、選ばれた民である自分たちこそが、天にある住まいで、いつまでも神様とともにいることができるのだと思い込んでいました。本当は息子ではないのに、本当は罪の奴隷のままなのに、その現実気づいていなかったのです。このままでは永遠に神様から引き離され、彼らは自分の罪の中で死ぬ運命にありました。

ですから、イエス様はこのように言われたのです。「もし子（イエス様）があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」と。かたくなな彼らのことを、切り捨てるようなことをせず、あわれんだ救い主は、子である自分だけが本当の「自由」を与えることができるのだと、彼らをご自分のもとへと招かれていました。彼らが本当に必要としている罪の赦し、救いを差し出そうと御手を伸ばされていたわけです。わたしだけがあなたがたを「自由」にし、罪の奴隷から助け出すことができるのだと。すごい忍耐だと思いませんか。すごい優しさだと思いませんか。あまりにも深い愛だと思いませんか。それがイエス様というお方でした。そして感謝なことに、この方の愛は今も何も変わっていません。救い主は今もなお、変わらずに、ご自分のもとに立ち返って信じるすべての者に、罪の赦しを与え、主に従い、主とともに歩いていくことができるという本当の「自由」を与えてくださいます。

もし、まだ救い主を信じていない人がおられるなら、自分の心のうちに、主とみことばへの愛やきよさを求める思いが全くない人がいるのであれば、どうか、へりくだって主に助けとあわれみを求めてください。そのまま自分の罪の中で死なないでください。どうか、きょうというこの日、救いがまだあるという日に、救い主を心から信じて、この主に従っていく本当の「自由」を、本当の喜びを自分のこととして知ってください。もし、自分の救いについて話したいという方がいれば、自分のこととしてよく考えて、牧師に聞いてみてください。

また、自分はイエス様を信じて、主とともに歩んでいると言う皆さん、私たちは自分の歩みの中で、時に不安になることがあります。何度も過ちを重ねて、ひどい罪を犯して、神様を悲しませる時、自分の救いは本物なのだろうかと思うことがあります。そのような時には、きょう一緒に見たみことばを思い出してください。イエス様のことばに耳を傾けてください。確かに、私たちの愛はどこまでも足りてはいません。「主を愛すべき形で愛していますか」と問われれば、それには到底足りていない者ですが、私たちのうちに少しでも主への愛があり、みことばにとどまって、何よりも主に喜ばれることをなしていきたいという思いがあれば、それが本物の弟子である証明になります。なぜなら、生まれながらの罪人は、神様のことを何よりも愛したいなどと思う者ではないからです。生まれながらの罪人は、罪から離れてきよさを求めたいと望む者ではないからです。主を心から愛して、どんな時も主のことばに従いたいという思いは、私たちのうちから来たものではありません。罪の奴隷から解放された救われた者に、神様が与えてくださるものでした。弱さはたくさん覚えます。つまりくともあります。罪を犯して涙を流すこともあります。神様をひどく悲しませることもあります。その時は、私たちを罪の支配から救い出してください。驚くべきことに、私たちのすべての罪は、あの十字

架上で、身代わりとして死んでくださったお方のすばらしい犠牲によって、すべて赦されました。ですから、その主の犠牲に心から感謝し、罪から救い出してくださった主のみわざを心から喜んで、主のためにすべてをささげて生きていくことです。忘れてはいけません。かつて私たちはみな、罪の奴隷として、暗い罪の中に囚われた者でした。しかしそれは「真理」であるイエス様を信じた時に終わりました。その古い生活は終わりました。世の光として来られたまことの「真理」が、無力だった私たちを助け出してくださいました。罪に勝利する者として、主に拠り頼みながら、みことばに忠実に従って生きていくことができます。何よりも、私たちに救いを与えてくださった方を喜ぶ者として、ますます主のことばにとどまる者として、今週もともに成長していきましょう。